

# ギャンブリング ＊ ゲーミング学会 ニュースレター No.9

## *Japan Academy of Gambling & Gaming Studies Newsletter No.9*

### [記事]

#### 観光立国と競馬場

橋爪 紳也 1

#### Casino News 2006 Vol.3 Around Worldー世界のカジノ情報ーアメリカ編

中條 辰哉 4

#### ラスベガス・バックステージ<第9回> ラスベガスのスペシャリスト

泉 豊禄 7

#### ギャンブル@写真館<第9回> ーハイローラーの住環境ー

谷岡 一郎 8

#### レーシーノの可能性と限界

美原 融 11

#### Do You Know this<第9回> 地方の花札屋さん(その二)

梅林 勲 15

### [書評]

#### 『数学ゲームⅠ・Ⅱ』

谷岡 一郎 23

#### 『東京少年昆虫図鑑』

岡本 美紀 25

### [掲示板]

#### 第4回学術大会が開催されました

28

#### ギャンブリング ＊ ゲーミング学会決算報告の件



世界有数のリゾート都市として脚光を浴びるドバイを視察する機会を得た。冬場は欧州の人に人気のある避寒地として知られているが、私が訪問した6月は最高気温47度、海水温も30度を超える文字通りの炎天下であった。

確かに例のない観光地である。砂漠を四駆で疾走するサファリ、砂のゴルフ場、駱駝のレース場、金製品の店が集まるゴールドスークなど、ここにしかない楽しみがある。また関税がないため一流ブランド製品が安い。なかには屋内スキー場を併設する巨大ショッピングモールある。

東京タワーに準じる高さを誇る七つ星級の超高級ホテルが、都市のランドマークであるという事実がこの都市の本質を語っている。五つ星級のホテルもあいついで開業している。全室が海底にあるというブティックホテル、著名なデザイナーであるアルマーニが手掛けるホテルの工事もすすむ。数年後には世界最大規模のテーマパークを含む巨大リゾートが完成するのだそうだ。

もっとも観光都市という顔はドバイの一面でしかない。広幅員の幹線道路沿いには、ひとつとして同じデザインがない超高層ビル群。その周囲には見晴らす限り、幾十あるのか数えきれないほどのビル工事現場がある。世界中にある高層ビル用の建設クレーンのうち、2割から3割ほどがここに集中しているとガイドは説明した。

デベロッパーのモデルルームを順次めぐるツアーに参加した。人類史上最高となる800メートルを越えるビルディングの現場、巨大な椰子の樹木や世界地図のかたちをした海上リゾート地などの不動産物件を視察してめぐる。パンフレットには、これまでの世界七不思議に新しい一項目を付加し、「八不思議」にするという意欲が記されている。

人口増に比例して、不動産物件の供給が急増している。原油の輸出が始まる70年代初頭にはわずか数万人の人口であった街が、いまや113万人を擁するにいたった。さらに今後の開発で、300万人程度の巨大都市を目指すのだとガイドは説明した。ただし国籍を持つ住民は2割にも満たないらしい。都市の担い手は、ほとんどがイスラム諸国からの出稼ぎ労働者である。アラビア語が通じない人が大多数なので、さまざまな発音の英語でやりとりがなされている。定住民ではなく短期滞在者や観光客が、この都市の活力を支えているのだ。ドバイはこれまで私が定義してきた「集客都市」の典型である。



なぜわずかな期間に、砂漠のただなかにこれほどの巨大都市を建設しようとしているのか。石油資源が尽きたあとも、この都市が繁栄する手段だという説明を受けた。そこで観

光産業に加えて、金融関連の産業振興を重点化、さらには付加価値を高める都市型の先端産業の集積をすすめていると受けた。実際、インターネットシティ、メディアシティなどの拠点施設のほか、医療産業や大学・研究機関の拠点やテクノパークの構想など、実質経済に関わる開発も他の都市にない速度で具体化しつつある。所得税や法人税を免除、海外送金も自由にすることで世界中の企業がドバイへの投資を促そうというわけだ。アフリカや西南アジアなど、想定している後背地の人口は14億人ほどにもなるという。

イスラム文明をバックグラウンドにしつつ世界に通用する普遍性を持つドバイは、西洋近代が産みだした先例とは別種の世界都市である。そのユニークさの多くは、シェイク・モハメッドのアイデアに求めることができる。王の想いをそのまま目に見えるかたちにしたという意味において、新しい時代の理想都市と評してよいだろう。



安全で楽しい高級リゾートにあって、競馬場も魅力的な観光アトラクションのひとつになっている。ナド・アルシバ競馬場は、アメリカのチャーチルダウンス競馬場をモデルに1986年から建設がはじまる。当時世界最高賞金であった米国のブリーダーズカップクラシックを越える国際レースであるドバイワールドカップが実施されるようになったのは1996年からだ。世界有数のオーナーブリーダーとしても高名なシェイク・モハメッドの想いを実現したかたちだ。すぐにもケンタッキーダービーやブリーダーズカップクラシックとなれば、世界から注目を集める最高峰の競争となった。

一般のスタンドに加えてVIP用の観覧席がある。レースの日には黒塗のリムジンで、国際空港から直接競馬場へ乗りつける人もあるそうだ。観光客もおしゃれをして、超一流ホテルのビュッフェがセットされた席で、世界有数の名馬たちの晴れ舞台を眺めることができる。日本からは97年にホクトベガが参戦、レース中の事故により帰らぬ馬となったことが思い起こされる。ちなみにこの年は、砂漠の都市には珍しい記録的豪雨により約1週間順延されたが、シェイク・モハメッドは軍のヘリをコース上で超低空飛行させて、馬場を乾かしたという逸話がある。

もっとも敬虔なイスラム教国であるドバイでは賭け事は禁止されているため私が訪れた時期にはレースは行われていなかった。しかしゴルフ場を併設した美しい競馬場のスタンドは、無料で公開されている。ドバイワールドカップの歴代優勝馬を始め、名馬の記念品を陳列するミュージアムがある。またクラブハウスの売店では、ドバイワールドカップにちなむ商品が多数用意されており、土産として購入する外国人も多いそうだ。また今回は時期があわずに参加できなかったが、競馬場のクラブで朝食をとり、調教の様子などを視察できる独自のツアープログラムもある。

日本政府は「観光立国」をうたい、外国人観光客の誘致に真剣になっているが、公営ギャンブルを観光資源とみなす視点はまだ十分にはない。施設の充実も含めて、外国の人たちにも憧れとなるようなレース場のデザインと国際観光という視点を考えたホスピタリティの充実を考える時期にあるのかも知れない。

### ラスベガスの伝統の消失

古き良き時代を知るギャンブラーたちは、今のラスベガスに少なからず不満を持っているようである。ラスベガスの歴史とは、ギャンブラーのニーズを満たすことで発展してきた。低価格なホテルやレストラン、ショーなどを提供したり、顧客との間に人間関係を構築したりすることでギャンブラーを大切に扱ってきた。

しかし、現在のストリップ通りのカジノといえば、高級レストラン、一枚 100ドル以上もするショーチケットなど、高級志向な戦略が目立ってきている。そして、最もギャンブラーを落胆させるのは、カジノ側との人間的な交流が、小さなVIPカードと暗証番号に取って代ったことである（ハイローラーを除く）。昔ながらの手法やサービスでギャンブラーを「もてなす」カジノは、特にストリップでは少なくなっているようである。

では、これらギャンブラーを楽しませるカジノはまだ存在するのか？サムズタウン、パレステーション、ニューオーリンズ、ゴールドコースなどの地元型カジノがまさにその代表であるといえる。豪華なレストランや旅行客が好むアトラクションやジェットコースターなどはない。しかし、そこには顧客のプレー内容に対応した顧客ロイヤリティープログラムと人間味溢れる関係が存在するのである。

一度動き始めた時代の流れは変らない。そして時代は、往々にして逆戻りはしない。しかし、カジノを選びさえすれば、そこには昔ながらのギャンブラーを「もてなす」のカジノを楽しむことができるのである。

### フィラデルフィアの競馬場がレイシーノに

競馬場にスロットマシンを設置した「レイシーノ」という形態は、アメリカ全土で成功を収め、さらに拡大しつつある。今年の11月、フィラデルフィアの競馬場も生まれ変わる。小さくて閑散とした競馬場から、1500～1800台のスロットマシンを導入することで、大きくて熱気溢れる競馬場へと変貌しようとしているのだ。

このスロットエリアには、ステーキハウスやパフェ、スポーツバーも兼ね揃え、多くの来場客に対応する為に5000台を収容できる駐車場を併せ持つ。建物は3階建てとなり、アメリカ国内の競馬場で行われているレースにも賭けることができるのである。

更に3年以内には、これらスロットマシンを競馬場から同敷地内にある隣接施設に移動させ、最終的には3000～4000台のスロットマシンとリゾート施設やホテル、レストラン、スパ、ショッピングセンター、ナイトクラブなどを建設することが計画されている。

これらの相乗効果により「単なる競馬場」からエンターテインメントを提供する「複合型施設としてのレイシーノ」に進化するであろう。

### 勝ち易いスロットマシンの見分け方

昔は、勝ち易いスロットマシンを見つけることは簡単であった。カジノの入り口など目立つ場所に設置してあったためである。理由は簡単、コインをたくさん出して、「勝っている場面」を見せるための広告塔としての役割を担っていたからである。顧客に勝たせ、他の客にも「勝つ可能性」を示唆することで、集客と売上に一役買っていたのである。

この背景には、昔のスロットマシンが提供する根本的な商品価値が、「お金がたくさん出る」ことであったため、「出ている」場面をアピールする広告塔の役割を果たす「勝ち易いスロット」が設置される場所は、人通りの多い場所となったのである。顧客側からすれば、人通りの多い場所のスロットマシンを選ぶことで、勝つ確率を高めることができたのである。

ところが、現在では「人通りの多い場所のスロットマシン＝勝ち易いスロットマシン」との図式は当てはまらなくなっている。理由はいくつかあるが、1つには、マイクロプロセッサの発達により、面白いデザイン、サウンド、画面の動きなどを駆使すれば、様々な「視覚的にエキサイティングなスロットマシン」を提供することができるようになり、「コインが多く出る」という機能に依存する割合が減ったからである。2つ目の理由として、雑誌などの記事により「勝ち易いスロットマシン」の場所は、「列の最後」、「フロントの近く」などの説が顧客の間に広がった為、カジノ側もその位置を分かりづらくした点である。3つ目の理由として、顧客によってはプレーしたスロットマシンの還元率を記録し、「勝ち易いスロットマシン」を見つけ、そのスロットマシンで再度プレーするため、カジノ側はこの行動を逆に利用し、「勝ち易いスロットマシン」を点在させることで「ポジショニング・ツール」として利用するようになったからである。

いずれの理由にせよ、以前のように、カジノの入り口のスロットマシンを選べば「勝ち易い」という単純な図式が変化したことは間違いない。

ではいかにして「勝ち易いスロットマシン」を見つけ出すか？1つの方法としては、色々な要素を加味しながらハイリターン（高還元率）を集客戦略に掲げているカジノを選ぶことである。これらはストリップよりも、往々にして地元型カジノに多い。しかし、理解しなければならないことは、これらの「ハイリターン」や「高還元率」は、長期的・確率的に起こることであり、大数の法則が働くレベルにおいて現実化する。よって、短い期間のプレーにおいては、やはり勝ったり負けたりする訳であり、ハイリターン（高還元率）を掲げるカジノへ行ったからといって勝ちを約束される訳ではない。

結論としては、マイクロプロセッサにより管理されるスロットマシンを、確率上の揺らぎの中でプレーする状況において、「勝ち易いスロットマシン」を探すというほぼ不可能

に近い行動に明け暮れるより、自分が楽しめるマシンを探す方が理に適っているのではないか。勝ったり負けたりを楽しむことがギャンブルの醍醐味であるとするならば、仮に負けたとしてもエキサイティングなひと時を過ごせれば良しと考えるべきである。

#### **地元型カジノの変貌**

地元型カジノが設備を増強している。アリゾナ・チャーリー・ボーダーは 830 万ドルをかけた改装を完了した。新たなゲーミングエリア、フロントデスクエリア、リワードセンターやギフトショップを兼ねそろえ、エリアも拡大し、顧客のアクセスが簡単になった。この改装は、顧客の意見に耳を傾け、その要求に基づいて行われたのであり、目的は言うまでもないがギャンブルや食事を楽しむ顧客の利便性の向上にある。

テレブル・ホテル・カジノも166のゲームを追加し、新たなプレーヤーズクラブのシステムを導入した。コンプを受けるには単にプレーヤーズクラブカードを支払い時に機械に通すだけで完了するシンプルなものとなった。

この他、サンタフェ・ステーションでは、900台を収容できる駐車場を新たに増設し、ホイール・オブ・フォーチュンのスペシャルエディションであるスーパースピン・ビデオスロットなども導入した。

地元型カジノの進化は止まらない。この秋、多くの驚くべき変化を見ることになるであろう。

(全記事、CASINO PLAYER 2006年9月号より)

### ラスベガスのスペシャリスト

アメリカには星の数ほど弁護士がいます。ラスベガスにもしかりですが、ラスベガスの特長はなんといってもゲーミングに関する弁護士が多いことです。

カジノのライセンスを取得するために、ほとんどのライセンス申請者は弁護士の力を借ります。この分野の弁護士の中には、ネバダ州ゲーミングコントロールボードのボードメンバーであった人もいます。そのほか、専門分野が、インディアンゲーミング、インターネットゲーミング、世界のカジノ法、カジノ建設、マネーロンダリング、などなどの弁護士が存在し、このうち一流の弁護士はラスベガスのみならず全米から引っ張りだこ、さらには世界に活躍の場を広げています。また、業界を代表して、州政府、時には連邦政府を対象に、ロビー活動を専門とする弁護士もいます。

C P A（公認会計士）もゲーミング業界では大きな役割を果たします。第一にラスベガスのカジノは、非公開企業であろうがなかろうが決算期ごとに会計士による監査を受け、ネバダ州に決算報告・監査報告の義務があります（当然ながら）。また、四半期ごとに内部統制（Internal Control）の監査を受け、ネバダ州に報告する義務もあります。これもC P Aが行います。さらにラスベガスでは企業の買収や合併、上場、社債の発行が大規模かつ頻繁に行われ、これもC P Aが大きな役割を果たします。

最近では、全米各地から著名なデザイナーや建築家が選ばれ大規模カジノリゾートが設計されることも多いですが、やはりラスベガスにはカジノを対象とした設計士が存在します。見た目やパブリックスペースだけではなく、バックオフィスや従業員スペースなど、カジノのオペレーションを知り尽くした設計士がいることで、超メガリゾートもその後の運営がスムーズに進みます。

その他にもギャンブル中毒対策のスペシャリスト、カジノセキュリティのスペシャリスト、カジノ保険のスペシャリスト、いかさま対策のスペシャリスト、内部不正対策のスペシャリスト、などなどラスベガスには多数のスペシャリストが存在します。これらカジノに関する一流のスペシャリストが一箇所で皆揃う場所は、多分、世界でもラスベガスだけではないでしょうか。

ラスベガスのメガカジノ企業が世界各地でカジノリゾート展開を進めている今、日本でのカジノにも彼らの進出を歓迎するのでしょうか。それとも和製で進めるのか。和製であってもこれらスペシャリストの活用は不可欠かも知れませんね。



## ギャンブル秘写真館＜第9回＞

### －ハイローラーの住環境－

谷岡一郎

「ハイローラー」と言いまして、ピンからキリまでおります。今回は今年、ラスベガスのヴェネチアを訪問した時、特別に許可を得て撮影いたしました、「ピン」の方々の生活環境を紹介したいと思います。

まずはゲームの環境ですが、プライベート・ルームがいろいろと揃えられておりまして、当然ひとりでプレイすることもできます。客によっては2～3テーブルある部屋の特定の椅子でないとダメ、というケースもあるそうで、特に中華系はゲンをかつぐ人が多いとのこと。と言うより、最近のハイローラーの大半は中華系だそうです。

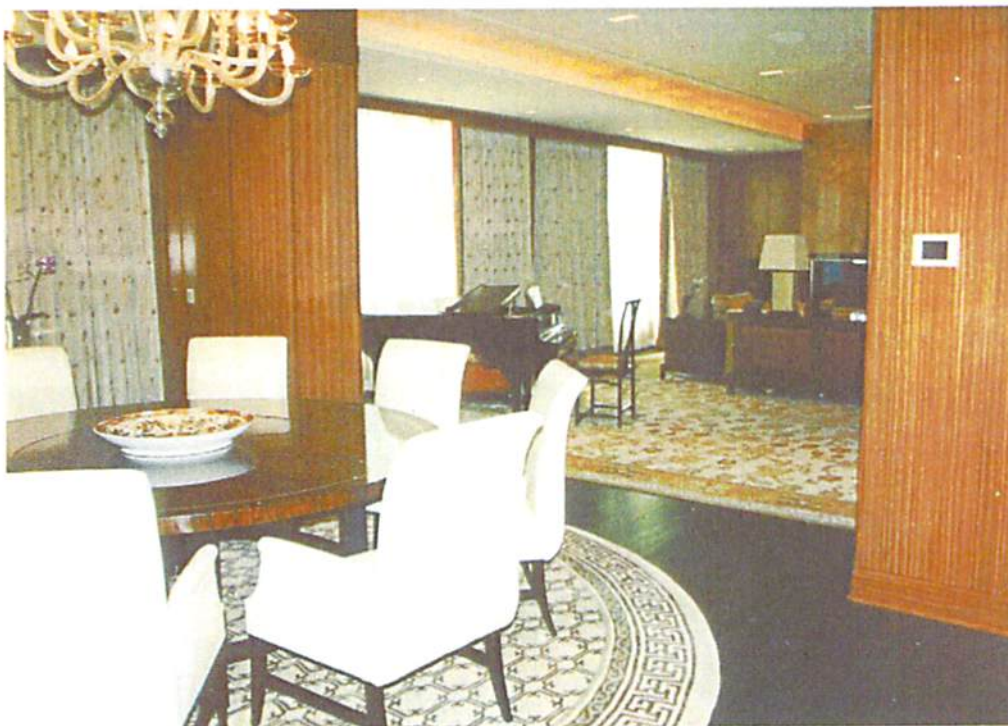


写真①：準備中のプライベート・ルーム。中央のオレンジ色のチップは、「パンプキン」と呼ばれ、1枚2万5000ドル。その横の茶色のチップは、1枚5000ドルの「チョコレート」。



写真②：プライヴェート・ルームの横には、食事やその他のコーナーがある。何でも注文すれば、5分以内に持ってくるという。

ヴェネチアのスイート・ルームは、34階から36階くらいにあります。その中でも特に最上級、料金設定のない（つまり招待客しか泊まらない）、チェアマンズ・スイート・ルームを見せてもらいました。



写真③：ヴェネチアのチェアマンズ・スイート・ルーム

わたしは、いろいろなホテルの特別ルームを見せてもらったことがあります。しかし、これほどムチャクチャなスイートを見たのは初めてのことでした。写真では紹介しきれませんが、部屋はベッド・ルームだけで 5 室、それ以外にトレーニング・ルーム、健康チェック・ルーム、カラオケ・ルームなどもあります。もうひとつ、これはナルホドと思ったわけですが、理容師がやって来て頭を刈るための部屋と器具までありました。テレビが少なくとも 16 台あるのは判りましたが、数えるのがややこしくなってやめました。

素朴な疑問といたしまして、こんな部屋に泊まっても、どうせギャンブルに浸っている間は使えないわけで、……どうすんだろ。案内してくれた人によると、クリントン前大統領がしょっちゅう来てるそうです。もちろんヒラリーは家においでくる。



レーシーノ (Racino) なる言葉等聞いたことも無い人がいるかもしれないが、競技場 (Racetrack) とカジノ (Casino) をかけあわせた英語で、長期的な人気の低落に歯止めが効かない競馬・ドッグ・レース等を再生し、顧客・売り上げ減を何とかしのぐ方策として、90 年代以降米国に生まれた競技場にスロット・マシーンやビデオ・ロトリー・ターミナル (VLT)、即ち機械ゲームのみを設置した「カジノ」を併設する施設のことをいう<sup>1</sup>。魅力的な顧客誘致のための施設を新たに併設し、この収益による相乗効果を狙い、競馬やドッグ・レースの再生を図るという仕組みになる。いわば、競馬場にパチンコ場を併設する考え方になるが、半端でないのは、数千台ものスロットや VLT を設置した本格的な「スロット・カジノ」施設が前提となることにある。機械を置くだけで何がカジノなのかという人もおられるかもしれないが、現実には米国では既に 8 つの州でかかるレーシーノが制度的に認められるに至っている<sup>2</sup>。またその他約 20 の州において同様にかかる施設を設置する法制化が検討されている。一部カナダでも類似的な事象が存在している。

確かに競技とは一定間隔毎に実施されるため、間の休み時間も長い。この時間を活用してスロット・マシーンや VLT で効果的に時間を過ごさせ、遊ばせるという考えも無いことはない。但し、現実にある数千台のスロットを敷設したレーシーノとは明確に単に巨大なスロット・カジノが併設されただけにすぎず、とてもではないが、レースの合間にちょっとスロットをやるといった類のものではない。事実、レーシーノの設置は、施行者にとり多大の収益増をもたらしているが、競馬やドッグ・レースの実際のライブ・ハンドル<sup>3</sup>はレーシーノ導入初期には若干増加したがその後は、ほんの一部の施設を除き、低迷している所が多い。即ち、競技人気の回復には必ずしも貢献していないという厳然たる事実になる<sup>4</sup>。新しい顧客を呼び込むことにはなったが、レースには興味の無い顧客拡大になっている。競馬やドッグ・レースとスロット・マシーン、VLT に何らかの直接的相関関係があるわけではない。米国にはパチンコ屋はないわけで、近隣にカジノ施設が物理的に存在しない地域・州においては、簡易な形で賭博を楽しむことができる機械ゲームの存在は明確に顧客

<sup>1</sup> Racetrack Casino ともいう。もともと賭け事場で異なった新たな賭博行為を担うということから抵抗感が少なく、発展したという事情もある。

<sup>2</sup> NM (ニューメキシコ)、LA (ルイジアナ)、IA (アイオワ)、WV (西バージニア)、RI (ロードアイランド)、DE (デラウェア)、NY (ニューヨーク、2003 年より開始)、ME (メイン、2003 年許諾)。いずれも新たに制度的措置を図り、従来のパリミュチュエル競馬とは関係なく、新たな許諾システムを制定する手法をとっている。

<sup>3</sup> 顧客が競馬やドッグ・レースに毎日賭ける金額の総額をいう。この数値が向上しない限り、レーシーノは競馬人気の回復に積極的な効果をもたらしていないということになる。

<sup>4</sup> 例えば 2004 Update Of US Racino Legislation (University of Arizona, Race Track Industry Program) を参照。

を惹きつける大きな要素になっていることは間違いない<sup>5</sup>。尚、先行したレーシーノでは、その収益により昔の競馬場をホテルやゴルフ場を併設した競馬・ゲーミング・リゾート施設として発展させ、なかなかの魅力的な施設になっている所もある。かつ機械ゲームがもたらす収益配分により、競馬賞金を増やし、質の良い競馬を提供することに成功した事例もある。但し、一般的に事業は成功しているとはいえ、競馬の顧客増、競馬賭け金の増加には必ずしも繋がっておらず、別の顧客需要を喚起しているだけにすぎないということなのであろう。

では制度的にはレーシーノはどう措置されているのであろうか。全てが新たな立法措置に基づき、許諾され、実践されているが、施行の手法には二つの考え方がある。一つは民設民営で、これはパリ・ミュチュエル賭博となる競馬を担うライセンスを州政府から得た競馬場施設が別途、別の州政府機関からスロット・マシーンを設置し運営するライセンスを取得することにより事業を担う考え方になる（言わば一つの主体がダブルにライセンスを取得し、競馬場とレーシーノを運営する）<sup>6</sup>。もう一つの考えは、公設民営とでもいうべき考えで公的主体が直接経営に関与し、機材・システムを購入、実際の運営を競馬場施行者に委ね、収益を分配する考え方になる。この場合、例えば、既存のパリ・ミュチュエル賭博運営主体である競馬場を認定されたエージェントとして実際の運営を担わせる、あるいはシステムやハードの調達・リースも州政府の機関が実施し、運営を競馬場に委ね、収益分配を考えるなどの仕組みになる<sup>7</sup>。面白いことに前者は東部以外の米国地域、後者は東部地域に多い考え方で地域差がある。

更に興味深いのはいずれの場合でも、競馬場関連のパリ・ミュチュエル許諾は各州の競技委員会（Race Commission）の所管になるが、機械ゲームの場合には、既存のロットリー委員会（Lottery Commission）ないしはゲーミング管理委員会（Gaming Control Board）という具合に許諾付与の所管が異なる<sup>8</sup>。VLT だからロットリーに近いということもあり、ロットリー委員会の所掌となったのであろうが、ライセンス申請や許諾、許諾のための背面調査等も全てダブルになり、果たして効果的・効率的な管理の仕組みといえる

<sup>5</sup> デラウェア州にはカジノはないが、3つの競馬場(Delaware Par, Doven Downs, Harrington Racing)に各々、2500台、2500台、1591台の機械ゲームがある。西バージニア州も同様にカジノはないとはいえ、2つの競馬場(Mountain Race Track & Gaming Resort, Charles Tow Races & Slot)と2つのドックレース場(Wheeling Island Racetrack & Gaming Center, Tristar Racetrack & Gaming Center)に9400台以上の機械ゲームが設置されている。

<sup>6</sup> 例えばルイジアナ州 Louisiana RS27.351 Pari-mutuel Live Racing Facility Economic Redevelopment & Gaming Control Act.

<sup>7</sup> 例えば、西バージニア州 Racetrack Video Lottery Act(29-22A-1), Limited Video Lottery Act (29-22B-101)。実際の機材は認定メーカーの中から競馬場施行者に選択させ、州政府の機関がこれを買うかリースして供与、運営は競馬場施行者に委ね、収益は毎日電送し、これら調達経費やシステム・管理経費を差し引き、関係者間で分配するという考え方になる。

<sup>8</sup> 最も Racing & Gaming Board として解り易く州政府機関を一体化してしまった州もある。

のか懸念がないわけではない。VLT は基本的にはスロット・マシンと原理は同じなのだが、歴史的な経緯により、複雑な許諾のあり方になっているのであろう。もっとも現在では VLT は当然 100% キャッシュレス・マシンとなり、全ての端末機械が規制当局に設置されるコンピューターによる中央監視システムにネットワークとして連結され、効率的な全体の監視がなされる構図を前提とする。結果、払い戻しの電子スリップもその現金化も全てシステムにより正確に捕捉・管理されるため、監視も簡素化でき、不正が限りなく生じにくい仕組みともなっている。また限りなく、運営者も規制者も監視と管理の費用を削減でき、収益性も極めて高い。この収益は、競馬場に対する運営経費（公共経営の場合にはエージェンタたる競馬場にコミッションとして支払われる）、州政府の税収、競馬賞金の規模の拡大、機材やシステムのリース・モニタリング等費用等に分配される<sup>9</sup>が、競馬場の経営主体にとっては利益率の高いビジネスになると共に、競馬賞金への資金補填により、一部施設では競馬の質が高くなるという効果は確実に生まれて、競技振興に貢献している側面は存在する<sup>10</sup>。

もっとも現実におこっている現象は、競馬場の複合リゾート化にある。これら競馬場の経営者の関心は利益を生まない競馬ではなく、別の側面に集中しがちとなってしまっている<sup>11</sup>。かつまたこれらレーシーノに単純な機械ゲームのみならず、テーブル・ゲームをも設置することを許諾しようとする動きが一部州にはある。こうなった場合、競馬場は明らかにミニ・カジノ化し、競馬も余興の一つ、施設自体は本格的な地域「カジノ」へと変身しかねない。近隣地区に本格的なカジノ施設が限られる場合（特に人口集積地である米国東部各州はそうなのだが）、レーシーノはこれら潜在的賭博需要を吸収できる余地があると共に、競馬場がミニ・カジノ化していく趨勢は変えられようもない<sup>12</sup>。異なった賭博種の融合と並存は現代社会におけるひとつのトレンドでもあるのだ。

<sup>9</sup> 分配のあり方は州毎に異なる。例えば実質運営者たる競馬場に落ちる金は、デラウェアでは 48%、アイオワでは 70.9%、ルイジアナでは 59.5%、ニューメキシコでは 54.7%、ニューヨークでは 20.2%、ロードアイランドでは 26~28.9%、西バージニアでは 40.9%になる。残りの主要部を州税、残額を競馬などの賞金や一部費用に充当する。この配分のあり方には多様な考え方があり、興味深い点になる。

<sup>10</sup> 米国ではバリ・ミュチュエル賭博の再生という考えがあると共に、一方では財政難に伴う州政府による新たな財源を確保するという意味合いもある。州政府が担うロトリーを含めると、賭博収入が財政に占める割合が相当のレベルになる州もあり、伝統的な賭博税収入の低迷は、あらたな財源確保を追及するという背景をもたらしている。税収確保のための安易な許諾が適切か否かとする議論は現在でも存在する。また米国賭博影響度評価委員会 (NGISC) 99 年報告書は既に市場の信任を得ていないバリ・ミュチュエル賭博の支援ないしは他の賭博種への対抗措置としてカジノ賭博類型を既存の競馬場などで展開することは好ましくないことを指摘している。収益の内部補填は確実に市場構造を歪めるという指摘でもあろう。

<sup>11</sup> Racetrack & Gaming Resort と呼称し、競馬もあるが、ゲーミングをも提供し、宿泊施設やコンベンション、ないしはゴルフ場など多種多様な観光資源を含むリゾート施設という意味になる。競馬もカジノのその一つの要素となる。

<sup>12</sup> メリーランド州では 2003 年以降、4つの競馬場に VLT を 10500 台設置する為の法案を何度も修正しながら検討中だが、首都近郊の競馬場の性格を根本的に変える内容になり、これは最早スロット・カジノを作るという法案に近い。尚メリーランドの考えは隣州デラウェア、西バージニアでの成功に触発された動きでもある。イリノイ州では 2004 年レーシーノの一部にテーブル・ゲームの設置を許諾する法律が成立し、最早確実にミニ・カジノになっている。

異種賭博の併設・運営という考えは確かに人の動きと消費を変える要素がある。この同じ考えを低迷を続けるわが国の地方公営競技にも採用すべきという考えがわが国にもある。カジノが駄目ならせめてパチンコでも、という主張もある模様だ。確かに、かかる併設化は顧客増には繋がるとはいえ、わが国においても公営競技自体の顧客と人気を再生することに資するとは限らない。もっとも米国と異なり、わが国における制度的バリアーは高い。そもそも、これら換金可能なスロットや VLT を認める制度的枠組みが必要であると共に、例え制度的枠組みができて、第三者に機械ゲームを設置させるとする考えは限りなく、パチンコ・パーラーを競技場に設置し、これに公的主体が直接的に深く関与する考え方に近くなる。勿論米国の一部州の様に公的主体が主催者となり、実際の競馬を担う開催者が機械を設置し、運営を担うという考えは不可能ではない。但し、制度的には現在の公営競技の主催者は賭博行為には参加しておらず、競技を提供し、顧客に賭けさせているに過ぎない。一方、スロットや VLT あるいは類似的な遊技を公的主体自らが運営するとすれば、賭博行為あるいは類似的な遊技を公的主体自らが顧客に提供することになり、その意味合いはわが国では根本的に異なってくることになる。ハードルはあまりにも高すぎるという現実を正確に認識すべきであろう<sup>13</sup>。

よって、レーシーノはわが国の公営競技の不振に係わる全ての問題を解決できる妙法にはならない。またわが国においては制度的な壁により単純な形で異種賭博の併設化は実現しにくい。賭博の法体系全体を再考せざるを得なくなるからでもある。公営競技の再生とは個別公営競技を律する法律の枠組みからどうあるべきかを考えることが本筋になり、他の賭博収益による収益補填でこれを実現しようとする試みは好ましくない。問題の本質を覆い隠すことになるからである。

---

<sup>13</sup> 前述した如く米国においては政府部門が自ら主催しながら、実際の運営を競馬場に委ねる仕組みが東部各州には現存している。基本的にはリスクが限定される賭博行為でもあり、制度的には不可能とはいえないが、果たして公的主体が自らかかる行為を担い、税収を上げることが倫理的に適切か否かとする議論は残ろう。

## Do You Know This <第 9 回>

梅林 勲

### 地方の花札屋さん(その二)

前回は京都、大阪以外の地方の花札屋さんについての説明を行ったが、今回は地方の花札屋さんが作ったり、販売していた花札の代表的なものを紹介する。

#### 山形県

##### 酒田花(酒田任天堂)

2006 年に YAHOO オークションにてかなり高額で落札した花札である。出品者は秋田市南通築地 7 の 14 人で、花札の包み紙は失われていたが、外箱にはかるた・トランプ製造元酒田任天堂/酒田市上荒田と表記されていた。

花札のデザインは京都の業者が製造するものと大きく異なり、八八タイプの地方花に分類してよいと思われる。酒田任天堂の花札は、短冊に「たてさん」と書かれた同タイプのものがその後 YAHOO オークションに出品されたが、おそらく同一人物が持っていたものと思われる。高額になったゆえこの花札しか落とせなかったのは残念である。花札研究の第一人者である江橋崇氏は「花札の歴史」(遊戯史研究第 7 号、1995.11.10)において、酒田市にも花札の製造業者が存在したと述べているが、酒田任天堂のことではないかと思われる。酒田市は山形県であるが秋田県は隣接した県であり、酒田任天堂の花札が使用されていたのは当然と思われる。この花札のブランドは「歌垣」とされていたが外箱には、その他「檜扇」、「姫」、「天馬」のブランド名が書かれていた。

#### 岐阜県

##### 美濃花(マルエー)

マルエーは当初東洋骨牌という会社名で花札を製造していたが、その後ブランド名である(英)を社名にしてマルエー(株)とした。最後に作られた花札のデッドストックと思われる「御殿櫻」ブランドには会社所在地が岐阜県美濃市殿町と記されている。

昭和 20 年代後半から昭和 30 年代初めに創業しており、遠藤社長の名前を取って遠藤商店とも呼ばれていたようである。遠藤社長の死去とともに廃業したようであるが昭和 40 年代にはまだ花札の販売を行っていたようである。岐阜県美濃市は和紙の産地としても有名であり、そのような関係から花札製造が戦後行われたのであろう。

マルエーは八八花札、株札、本引札、虫花を作っていたようであるが、ブランドには「東洋一」、「金獅子」、「金龍」、「銀龍」、「御殿櫻」がある。現在紙の箱に入った「太陽」ブランド、プラスチックの箱に入ったブランド名不詳のものと「御殿櫻」ブランドの八八花札を三種入手しているが、「太陽」ブランド、ブランド名不詳、「御殿櫻」ブラン



ドの順に新しいものになっていく。それぞれ創業初期、中期、末期のものと思われるが最も新しい「御殿桜」でもトランプ類税の証紙が貼付されていて、トランプ類税が廃止される昭和の終わり(1989 年)頃には花札の製造は終えていたのであろう。入手した三種の花札はそれぞれデザインが異なるが、最も古い「太陽」ブランドを美濃花と称して紹介する。

## 滋賀県

### 近江八日市花(大日本トランプ)

滋賀県八日市市は 2005 年 2 月 11 日、神崎郡永源寺町・五箇荘町、愛知郡愛東町・湖東町の 4 町と合併して東近江市となっている(2006 年 1 月 1 日には隣接する神崎郡能登川町、蒲生郡蒲生町が加わっている)。八日市市は東近江市に加わった唯一の市として現在でも市の中心的存在で、旧八日市市時代からエンゼルトランプ(株)と大日本トランプ(株)というトランプ・かるたの製造業者が存在し、2 社とも大手のトランプ・かるた業者として地場産業の一翼を担っている。

この花札は大日本トランプが、大日本トランプ工業という社名を使用している時に製造していたもので、花札に銀筋を多用するという古いスタイルを残した八八花である。現在でも大日本トランプは花札の販売を行っているが安価な製品でデザインも特徴のあるものでない。むしろ現在ではトランプの製造・販売・輸出に力を入れており、自社のホームページでは花札の紹介・宣伝は一切行っていない。この花札は豊太閣というブランドで販売されていたもので、包み紙には大日本トランプ工業株式会社・滋賀県八日市 970-1 と記載されている。

大日本トランプは、昭和 34 年 5 月地元産業振興育成のため、国税局、県商工課、職業安定所、市商工会議所の援助のもと八日市市浜野町に大日本トランプ工業株式会社として設立され、昭和 41 年 9 月大日本トランプ株式会社に社名を変更している。花札の包み紙に貼付されているトランプ類税の証紙が昭和 35 年から使用されているものであることに加え、社名変更の年月からこの花札は昭和 35 年以降、昭和 41 年以前に製造されたものであることが分かる。

大日本トランプは会社設立に際し、京都のかるた職人を採用しており、花札のデザインそのものは京都のかるた製造業者の系統を受け継いでいる。なお、現在の大日本トランプの本社は東近江市八日市清水 2 丁目 1 番 39 号。

## 岡山県

### 備前玉野花(琴水堂)

花札のメーカーは琴水堂となっており、明らかに京都の花札業者が造るものとはデザインが異なる。この花札は 2006 年 6 月に YAHOO オークションにて入手したもので、大阪の玉井大黒堂本店の株札とセットにして落とした。出品相手は香川県綾歌郡宇多津町 191

の7在住の人で、出品相手にこの花札のことを聞いても何も分からなかった。

同年8月の初め京都の骨董業者福田氏にこの花札のメーカーを知らないかと問い合わせたところ、花札、めくり札のコレクターの方から、琴水堂は岡山県玉野市の製造業者であるということを福田氏経由教えてもらうことができた。

玉野市は宇野港を中心とする港湾都市で宇野港より宇高連絡線を始めとして、四国方面へのフェリーが出ている海上交通の要衝である。玉野市は漁師町として栄えたところでもあり、花札の製造業者が存在するだけの花札、株札の需要があったのは当然かと思われる。また、香川県綾歌郡は玉野市からは瀬戸内海を挟んで目と鼻の先であり、琴水堂の花札が大量に流れ込んでいたのであろう。

## 広島県

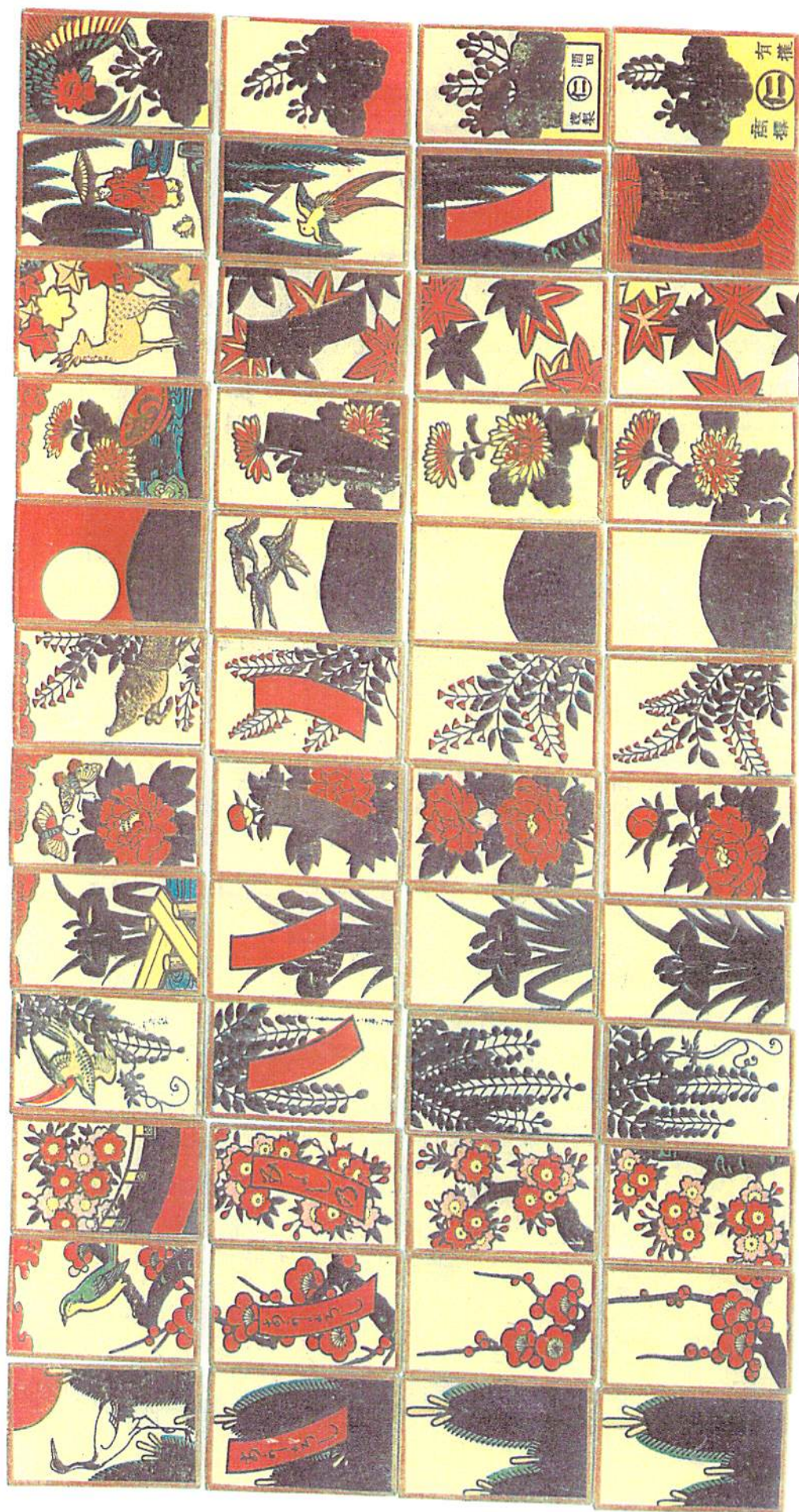
### 尾道花(日本娛樂)

広島県尾道所在の(株)日本娛樂の花札は、唯一神戸三宮の東急ハンズと岐阜市柳瀬商店街の外れの道具屋で見つけたのみだが、(株)日本娛樂はインターネットのタウンページで検索すれば現在でも発見することができる。それによれば所在地は広島県尾道市新浜2丁目7番6号、事業内容は囲碁・将棋用品、おもちゃ卸、娛樂遊戲機器・用品取り扱いとなっている。

販売する花札は、トランプ類税の証紙が貼ってある古い「布袋」ブランドと、証紙が貼ってない新しい「福の神」、「山伏」ブランドでそれぞれデザインが異なり、「布袋」ブランドは京都かるた製、「福の神」ブランドは田村將軍堂製で、最も廉価な「山伏」ブランドの花札は、ボール紙に印刷したものを切り離しているだけで、メーカー名が入っていない。

松井天狗堂のご主人に聞いたところ京都かるたは、大手の花札業者であった日本骨牌に勤めていた吉田氏が独立して開業したもので、昭和40年頃から10年程花札製造を行っていたということである。京都かるたの花札を見ることはあまりなく、つい最近骨董市で京都かるたが自社で販売していた花札を入手することができたが、デザインは日本娛樂の「布袋」ブランドと全く同じであった。しかし、京都かるたが自社販売した花札は松や坊主、猪や鹿の色付けに、はっきりした黒や茶色を使用しているのに対し、日本娛樂の「布袋」ブランドの松や坊主、猪や鹿の色合いは、薄い淡色の黒や茶に変えられており、おそらく京都かるたが自社製品との差別化を行ったのであろう。

「山伏」ブランドにも桐や紅葉の葉などに銀の筋が入っているという、少し変わった特徴があるが、デザイン的には最近日本各地で販売されているボール紙を切り離しただけの廉価な印刷ものとはほとんど変わらない。今回は古い京都かるた製の花札を「尾道花」として紹介する。



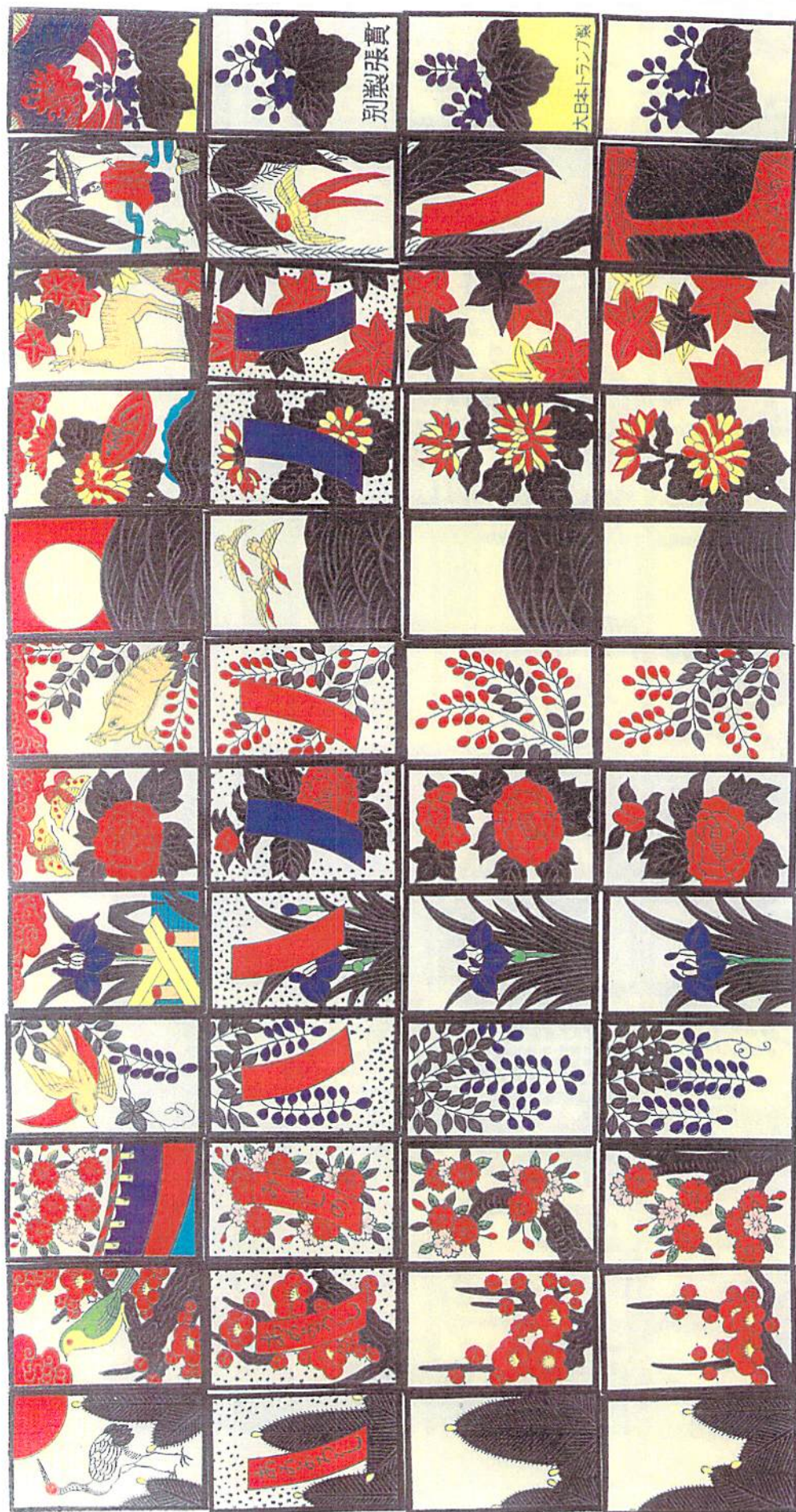
山形県  
酒田花 (酒田任天堂)





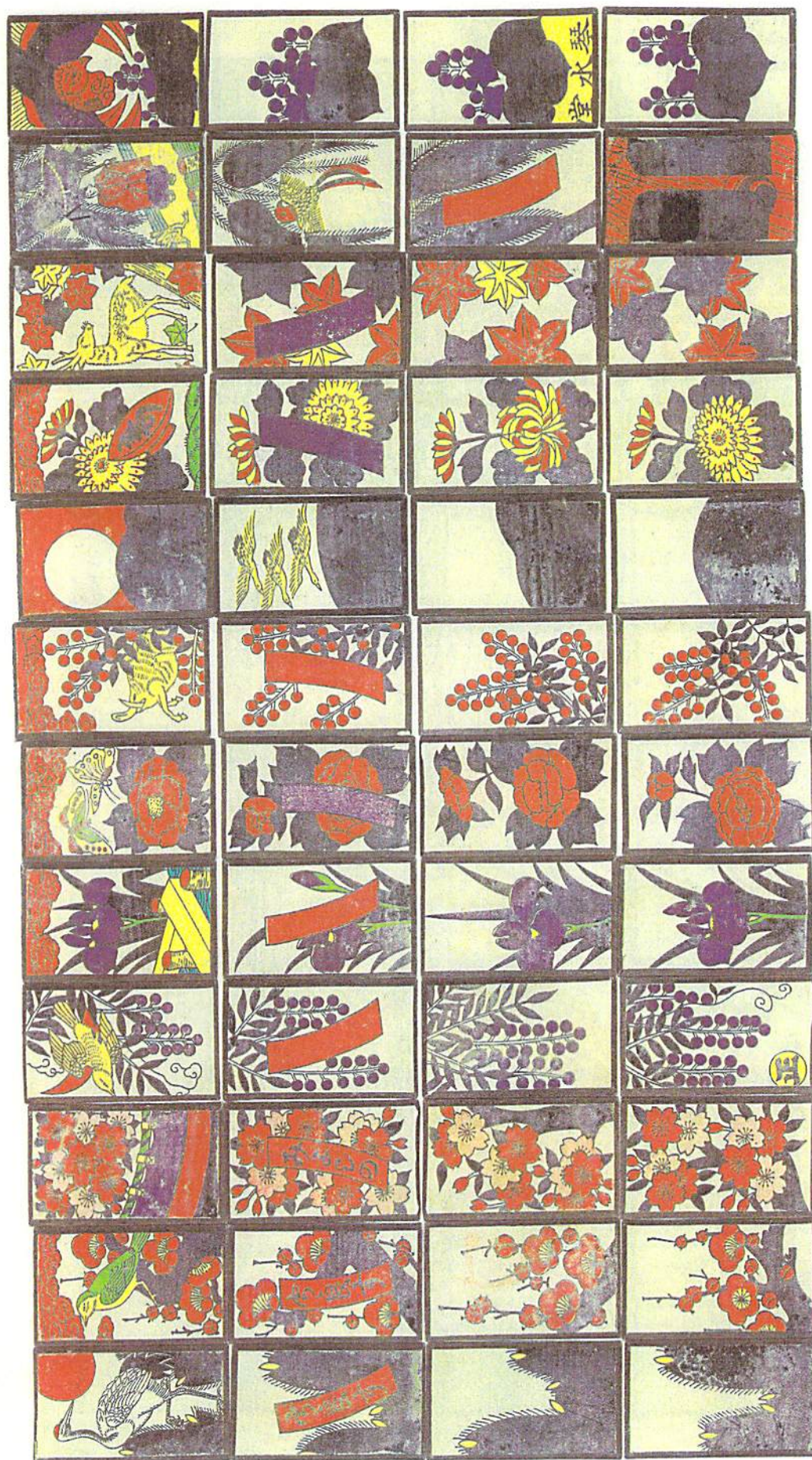
岐阜県  
美濃花 (マルエー)





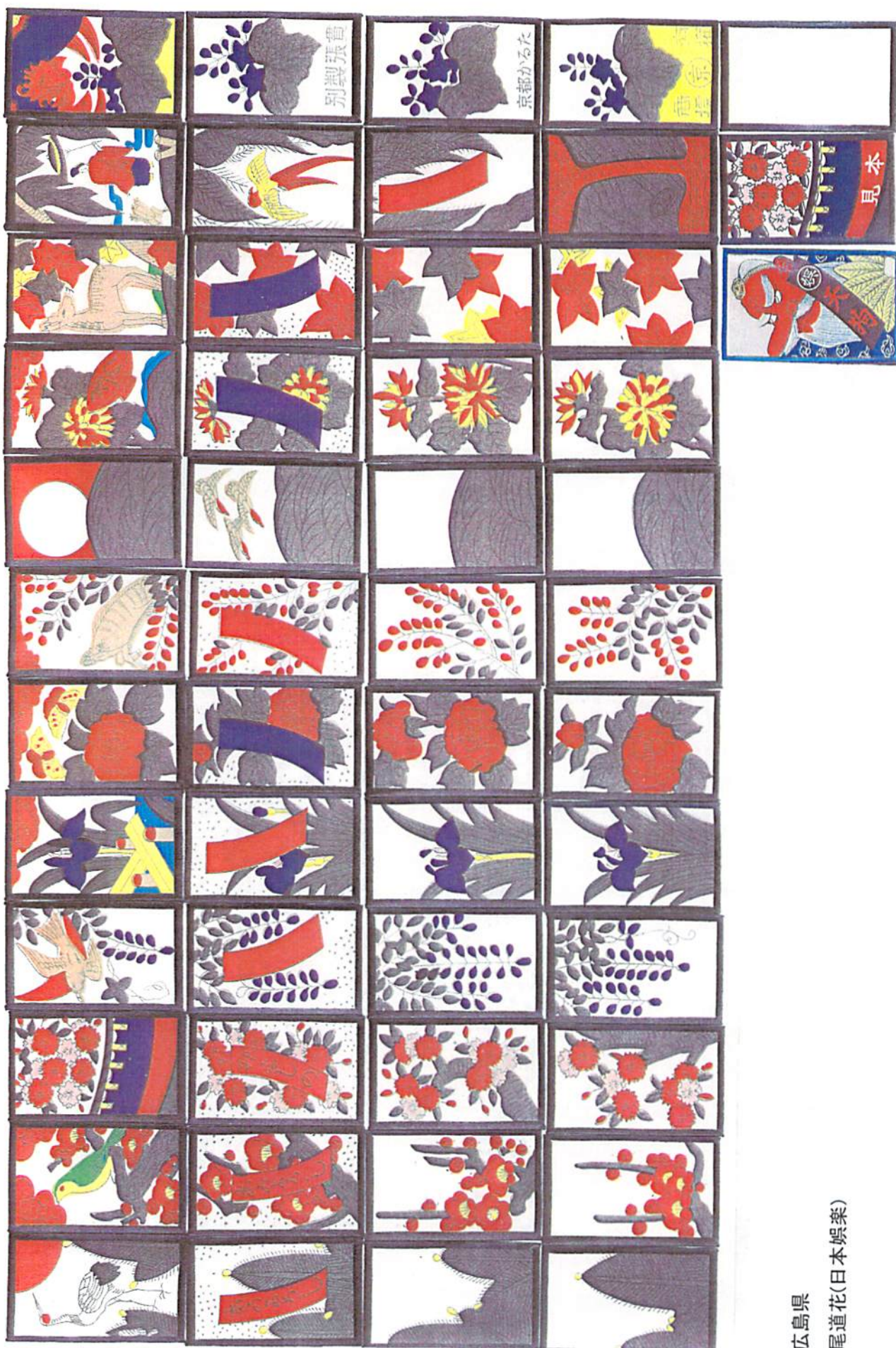
滋賀県  
近江八日市花 (大日本トランプ)





岡山県  
備前玉野花(琴水堂)





広島県  
尾道花(日本娯楽)



## 書評

マーチン・ガードナー(著)・高木茂男(訳)

『数学ゲーム I・II』(BLUE BACKS)

講談社(1974 年)

谷岡一郎

今回はマーチン・ガードナーがサイエンス・フィク・アメリカン(日本では日経から「サイエンス」として販売されていた月刊誌)に連載していた数学コラムをまとめた『数学ゲーム』を紹介したい。初刷は昭和 49 年に出版されているが、今だに読みつがれるスグレモノである。2 冊に分かれているが、どのチャプターから読んでも楽しめる。ただし少々の数理マインドがないと、苦しいかも。

### パズル本のベスト・テン

さて、パズル本としても楽しめるこの本だが、パズルとなるともっとおススメがいっぱいある。残念ながらリストの多くは入手不能の可能性がある。まあ古本屋で見つけた時のために紹介しておこう。

#### パズル本ベスト・テン

1. デイビッド・L. シルバーマン(梅田宗宏訳)『思考力を養う数学パズル』TBS 出版会、1997 年。
2. レイモンド・スマリヤン(野崎昭弘訳)『シャーロック・ホームズのチェス・ミステリー』毎日コミュニケーションズ、1998 年。
3. マーチン・ガードナー編(田中勇訳)『サム・ロイドのパズル百科 1~3』白揚社、1966 年。
4. J. F. ハーリー編(西村敏男訳)『リットン数学パズル 266 題』TBS、1972 年。
5. E. P. ノースロップ(松井政太郎訳)『ふじぎな数字ー数学のパラドクスー』みすず書房、1963 年
6. H. E. デュードニー(藤村幸三郎・林一・高木茂男訳)『パズルの王様①~④』ダイ

## 数学ゲーム I

楽しい数学へのアプローチ

マーチン・ガードナー著 高木茂男訳





ヤモンド社、1965 年。

7. レイモンド・スマリヤン（市場泰男訳）『パズルランドのアリス』社会思想社、1985 年。
8. アイヴァン・モリス（藤井良治訳）『アイヴァン・モリスのパズルブック①②』TBSブリタニカ、1978 年。
9. レイモンド・スマリヤン（長尾確・長尾加寿恵訳）『スマリヤンの究極の論理パズル』、白揚社、2001 年。
10. イアン・スチュアート（伊藤文英訳）『パズルでめぐる奇妙な数学ワールド』早川書房、2006 年。

スマリヤンの本が 3 冊もベスト・テン入りしているが、本当ならあと 3 冊入れたかったほどだった。日本人著者のものはとりあえず省略したけれど、良書はいっぱいあります。最後の本はエッセーですが、ガードナーのあとを受けてサイエンスのコラムを続けるイアン・スチュアートは、決してひけをとらない出来。スードクやカックロだけがパズルではありませんぞ。夜長の日々にパズルをどうぞ。

泉 麻人(文)・安永一正(絵)

『東京少年昆虫図鑑』(新潮OH! 文庫)

新潮社(2001 年) 638 円(税別)

岡本美紀



小学校に上がるか上がらないかという頃の夏休み、母親から雄のカブトムシを一匹買ってもらった。その日、いつも買い物に行く近所の商店街の路上に麦藁帽子を被ったオヤジが座っていて、木枠と金網でこさえた大きなかごの中にカブトムシやクワガタムシなどの、いかにも子供が喜びそうな昆虫をたくさん入れて買い手を待っていた。そのかごの中に入れてある枝に例の黒い姿がしがみついている様子が金網越しに見て取れる。たちまち私は興奮した。「こっ、これこそ幻のカブトムシやー」(彦麻呂風)。

すでに私が子供の頃にはカブトムシやクワガタムシなどの大型の甲虫は都市において身近なものではなくなっており、たとえ早

起きをして近辺の雑木林に出かけたとしても決してそいつらを発見することは出来なかった。そのため、「子供好きするそいつら」は格好の商売道具となり、デパートのペット売り場でも昆虫が売られるようになっていった。おそらく、その頃から「都市化・工業化のせいで虫をお金で買うような嘆かわしい時代になった。」とマスコミで言われ始めていたように思う。そのような状況にあって、急に自分の眼前に「昆虫図鑑でしか見ることが出来ない」と固く信じていた超レアなカブトムシの皆様」が現れたのであるから、その時の私の興奮たるやいかにばかりか。

私は実に妙な子供で、低学年女子の定番アイテムであるリカちゃん人形やジェニー人形なんぞには目もくれずただひたすら怪獣博士の道をまい進する日々であり、また、児童雑誌の口絵に描かれた「世界のカブトムシ」なんぞを眺めてはため息をついていた。中でも、日本には住んでいないという世界最大の「ヘラクレスオオカブト」を見ては、「こいつには一生会えないかもしれないが、なんてカッコイイのであろうか。」とうっとりしている始末。しかし、「日本のカブトムシは力持ち。小さい身体で重い物だって引っ張っちゃうんだよ。」なあんてキャプションの横に、いかにも重たそうな汽車の模型をツノに引っ掛けたひもで必死に引いている日本カブトのけなげなイラストを見ると、「やっぱり日本人は日本カブト

のファンじゃなきゃあな。」と、深い根拠もなく思ったりする。

私はあまり物を欲しがらな子供ではなかった。我が家は取り立てて貧しいということはないだろうが、ねだってまで買ってもらおうという意識が欠落していただけなのだろう。物事の交渉にはしみじみと向いていないタイプだ(ただ、大人になった今は無駄遣いを親から糾弾されまくっている)。だが、その時は「憧れのカブトムシ」が正直に欲しかった。で、普段から「欲しがらない子供」だったのと値段が「一匹50円」という破格な安値だったため、割とあっさり買ってもらえた。「うおー。何たる超ラッキー。こうなったら今日から毎日勉学に励むからね。」それは真っ赤なウソであった。

その日から「カブトムシ生活」が始まった。スイカを与え砂糖水を与え、胴体にひもを付け肩にとまらせて夏の炎天と一緒に散歩をした。あ、散歩しているのは私だけか。それにしても、今から思えば、これはかなりの「カブトムシ・ハラスメント」(略してカブハラ)だ。そのうち夏休みは終わり、秋になってもうちのカブト野郎は元気でキュウリを食い、結局その年の冬を無事に越して、翌年の春、風が暖かくなって花の咲く頃、動かなくなった。庭に咲いたチューリップの脇に埋めてやったことを憶えている。しかし、先日、この話を母親と懐かしそうにしていたら、彼女はこう言った。「夏休みが終わって学校が始まってからは、あんたの代わりに私が大いに苦労して育てたのである。」と。彼女は本当は虫が嫌いだったのだ。それを早く言ってくれよう。うう。

さて、月日が流れ、当然「昆虫は商品として買うものである。」という風潮がごく当然になった昨今、「ムシキング」というゲームが子供業界において流行った結果、再び「カブトムシブーム」である。各地で「世界の昆虫展」などというイベントが開催され、そして何と「ナマのヘラクレスオオカブトに触ろう。」なんていう謳い文句が付いているじゃあねえかよう。はあはあはあ。私の興奮が再燃である。もちろん出かけたさ。エエ歳こいてな。

会場にはまず「世界の昆虫標本」が並べられ「昆虫気分」を盛り上げる。出口にはお決まりのように「昆虫本体」やら昆虫関連本、昆虫採集グッズなどが多数売られており、「ほらほら買いなさいよねえ。」と誘っている。しかし、私の目指すのは、当然「世界のカブトムシに触り放題コーナー」である。うへへへ(風俗通いのおっさんかい)。さあ、あの幼児の頃からの夢がようやく叶うのだよ。わくわく。そうして、「放し飼いコーナー」の入り口を一步入ると、もお、そこは「ムシパラダイス」であった。会場内に設えてある木という木には、あの「世界一大きいカブトムシ」が惜しげもなくしがみついているではないか。きゃあー。その一匹を木の枝からはずして自分の手の平に乗せてみる。と、これは昆虫とは思えないほどの力で6本の脚を使って手を締め付けてくるのである。「おらおら、気安く触るんじゃあねえぞ。このボケがあ。」とガンたれるヘラクレスさん。ひゃあー。これほどのものだとは思わなかったよう。で、調子に乗ってもう一匹、髪飾りのように頭に付けてみた。のしっ。お、重い。またまた調子こいてもう一匹、ブローチのように服に付けてみる。がちっ。ピンで留めたように収まっている。わーあわーあ。カブトムシにまみれ我を

忘れて喜んでいる不審人物一人。きゃー、うれしいー。・・はっと気付いてみると、周囲ではたくさんの親子が「カブトムシ写生大会」を行っている最中ではないかいな。うへえー。邪魔やったかなあと反省しつつ、身体に貼り付けたカブトの皆様をべりっと剥がしていたところ、妙なことに気付く私。その現場にいて楽しそうにカブトムシに触りまくっているのは私だけだ。なぜ。どうして。ホワーイ。せっかくの「触り放題」なのに。おまけに、「日本にはいないヘラクレス」なのにいー。

考えてみるに、おそらく、ここにいる若い親子たちは全員「虫が触れない人たち」なのだ。おやじが触れないので子供も触れない。そう言えば、うちの近所の公園でセミ捕りをしていた子供たちが、せっかくセミを虫捕り網の中に入れたのに誰もそのセミを取り出すことができなくて全員で責任のなすくり合いをしていたことを思い出す。「お前が網から出せやー。」「そう言うお前が出せやー。」他人ごとながら、ああイライラするガキなこと。お前ら、何が目的でムシ捕ってるんじゃい。別に、虫に触ることができるのが一般常識だとか偉いことだとか思わないが、自分の手の中でセミがものすごいでかい声で鳴いたりカブトムシが手の平からなかなか離れないでしがみついているという感触は今でも忘れられない「エエ感じ」なんだけれどな。歳を取ったら、「まあ、いい歳して。くすくす。」なんて他人から秘かに笑われてしまうので、もう滅多に出来ないんだからな。しかしながら、私のように未だにカブトムシに触ってうっとりしている大人というのも、まあ、ナンですかなあ・・。

## 執筆者紹介

橋爪紳也	大阪市立大学都市研究プラザ教授
中條辰哉	大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究員
泉 豊祿	Hooters Casino Hotel (ネバダ州ラスベガス市) オーナー
谷岡一郎	大阪商業大学学長・教授
美原 融	(株)三井物産戦略研究所 プロジェクト・エンジニアリング室長
梅林 勲	大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究員
岡本美紀	帝塚山大学法政策学部助教授

『ギャンブリング\*ゲーミング学会ニューズレター』No.9

2006年9月30日

編集・発行 ギャンブリング\*ゲーミング学会事務局

〒577-8505

大阪府東大阪市御厨栄町4丁目1番10号

TEL06-6618-4068

FAX06-6618-4069